



■ テーマ名

行動変動性における反応提示の効果—個体内変化の検討—

■ キーワード

行動分析学、行動変動性、反応提示、セルフモニタリング

■ 研究の概要

精神健康上の問題がある場合、他者や自身の言語教示が自発的な行動のバリエーションを減少させること、つまり行動変動性を低下させることが指摘されており、心理面接場面では聞き返しと呼ばれる応答や選択肢の提示が変動性の低下を防ぐ機能を持つことが経験的に知られています。村井(2016)は聞き返しや選択肢の提示といった応答に、自己モニタリングの機能がある可能性を示しています。しかし、この実験はグループ比較で実施されており、個人内の変化を詳細に検討したものではありません。そこで本研究は行動変動性の低下を予防するメカニズムについて個人内の変化を検討し、より適切な心理面談の技術開発のための知見を得ることを目的としています。

■ 他の研究／技術との相違点

臨床で使用される技術は経験に基づいて構築されたものが多く、基礎研究とのつながりが弱いことが指摘されています。本研究は基礎と応用をつなぐブリッジ研究としての意義があります。

■ 今後の展開、実用化へのイメージ

本研究は反応のメカニズムを知るための基礎研究であり、この結果を踏まえて今後実際の面接場面を想定した実験を実施、具体的な面接技術の開発に取り組みたいと考えています。

■ 関連業績（特許・文献）

- 反応変動性に及ぼす選択反応提示の効果（査読付・単著）行動療法研究 42（2）p.215-p.224
注意と行動変動性（単著）日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 15 p.303-p.308
行動変動性に及ぼす強化履歴の影響：選択教示使用の有効性の実証的検討（査読付・単著）行動療法研究 40（1）p.23-p.32
行動変動性研究における不規則性指標（単著）日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 15 p.75-p.81
Lag スケジュールによる行動変動性測定（単著）日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 15 p.195-p.202
衝動的行動に対するセルフモニタリングの効果（単著）日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 14 p.127-p.134

■ 研究者から一言

人が成長に向かうときに起きる言葉や行動の変化のメカニズムに関心を持って研究を続けております。